



モンターヌスのもう一つの富士山図

富士山を描いた図を掲載した最初の西洋の書物と考えられるモンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』（1669年刊）から、前号に続いて、富士山図をもう一点紹介する。この図で描かれている火山は、同書における解説と照らし合わせると、「ウスルブラマ」であることが分かった。その説明によると、「尾張」にある山とされる。しかし、解説を読み進めると、この山は「計り知れないほどの高さ」を有しており、17世紀当時には山頂火口から絶えず噴煙が上がっていると記されていることから、この図版は「尾張にある山」ではなく、「富士山」を表現しているものと推定できる。少なくとも山の姿は富士山によく似ている。なお、火山が噴火した状態で描かれているのは、モンターヌスの想像力の産物である。というのも、17世紀の富士山については、噴煙は上がっていたようであるが噴火したという記録はないからである。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）